

富田林市若松団地における まちづくり活動

ひとがいきかい かぜがいきかう
かぜとおしのよい まちづくりをめざして!

若松町一丁目まちづくり協議会
事務局 坂本 信行

●やさしさ、親しみのある風景

若松団地は近鉄河内長野線富田林駅から程近い利便性の高い立地にありながら、都市計画道路、都市公園に隔てられていて、奥まった印象も強い。団地は概ね40年の間にその都度敷地が用意されて、事業が進んできたため、不整形な敷地に可能な限りたてられた住宅や施設がこみいった状態で混在し、昔からの道路はまとまった整備がされないまま残っている。反面、こうした路地や隙間地がやさしさ、親しみのある風景を留めており、住民には愛されている。

●かぜとおし

1996年、地元と富田林市行政によって若松団地住環境検討委員会がつけられた。その後、1998年、コンサルタントを加え、“より住みやすいまちづくりを考えるためのアンケート”が行われ、それをもとにしてマスタープランが出された。そこに、まちづくりの方針がもりこまれた。

「ひとがいきかい かぜがいきかう かぜとおしのよいまちづくり」がその時に出された地区整備の目標である。親しみやすい標語の1文字ずつに意味をもたせてある。

か：環境にやさしく、人間にやさしい、住いをつくる。

ぜ：全員参加で、お互いに助け合い、支え合う安心できるまちをつくる。

と：通り抜けが簡単にできる、物理的・心理的に壁のないまちをつくる。

お：おとなも子どもも、楽しい、活気のあるまちをつくる。

し：生涯を通じて、学びあえる文化の香りのあるまちをつくる。

●まちづくり リーフレット

1999年「若松町一丁目まちづくり協議会」が発足し、それまですすめてきたまちづくり活動のまとめとして、地域で活躍する医療、給食・福祉、子育てネット、教育、さらに、未来を担うこどもたち、青年と分野単位で“ひと まち ゆめ”をテーマにしてワークショップを行った。こどもたちは自分の将来とまちのこれからを重ねて考えることで、まちづくりを身近に感じてくれたと思う。これらの活動をまとめ『まちづくりリーフレット』を制作した。



『まちづくりリーフレット』

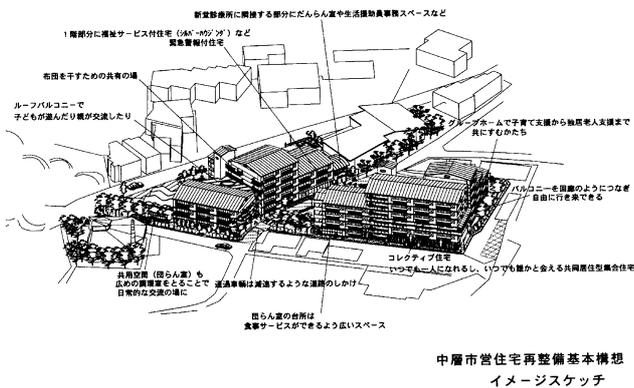
2001年からは大阪府「住宅・住環境まちづくり活動助成事業」の専門家派遣を活用し、まちづくりというフレームをはめることになった。もちろん、これまでも生活相談や地域活動など「同和地区」としてのたゆまないまちづくりが行われていた。まちづくりの成果はハード、ソフトの実現の枠をこえて、生活の質をどう向上させるか、それにどう取り組んでいるかだと思う。それは、これまで取り組んできた住宅、雇用保障など部落解放運動の根底に通じるものだ。こうした生活の基盤にある団地も既に年月を経て、建物の老朽化と設備の陳腐化が進んでいる。現在、これら古くなった改良住宅、公営住宅の建替えは高齢化した住民の切実な願いである。協議会の参加者でまちの将来像を語りながら、地域の面的整備のなかで建替え住宅のあるべき姿に住民の意向を反映させることは協議会の大きな使命であった。

●建替えを目前としたブロックは福祉ゾーンに隣接

建替えを目前にした住宅についての協議は、専門家を交えた住環境検討委員会で住民アンケートが最大限に生かされることを重視し、既にはじめられて

いた。ここでは、地域の改修ポイントが抽出されている。分析は住宅群を6個のブロックに分割し、まちを都市基盤の視点から児童館と都市公園を含む児童施設ゾーン、人権文化センター、公衆浴場を含む施設ゾーン、保育所、診療所をかかえる福祉ゾーンの3つに類別し位置づけられている。

建替えを目前としたブロックは福祉ゾーンに隣接しており、住環境検討委員会では建替えのイメージが提案されていた。（下図）



さらに、協議は入居者を含め継続されていくことになる。

●「まちづくり協議会」活動の初動期

協議会では、「まちづくり」活動への参加を広く呼びかけるために「まちづくり」の説明だけでなく、「まちづくり」は一人ひとりの身近なことであると実感してもらうことを心がけた。これには、既に団地で住宅改善が着手された事例を材料に使った。「第10住宅のエレベーター設置」、入居者、協議会、専門家が協力のもと入居しながら住戸内改修を行った「第4住宅の住宅改修」「第4住宅のエレベーター設置」などの住環境整備の具体的な内容を写真を交え、環境改善の取組みの様子をできるだけわかりやすく案内した。会合の参加者からは「一人一人がしっかり考えていかないと、人まかせでは理想の町も住宅も作れないと思った」の声が出された。

さらに、協議会は、身近な変化や目前にせまった第1・2住宅の建替えについて住民の要望を聴き、福祉ゾーンの整備の仕方について高齢者や団地居住者のリアルな実情を把握している福祉・医療の職業につく地域関係者を交えての話し合いを行っていった。

このように、行政と専門家と住民代表者を中心とした住環境検討委員会によって



つくられたまちづくりの構想を実現に移す場面により多くの住民の参加を得て協議していくことになる。当初の取り組みは福祉住宅やまちづくりの先進的な事例を見学し、まちづくりに関わった人々の話しを実際にきくことで福祉住宅の学習を行うことからはじめた。

●福祉ゾーンの住宅建替えへの取り組み — 環境共生住宅 —



こうして、協議会では東京の世田谷環境共生住宅や丸亀の富士見団地、兵庫の久二塚ふれあい住宅などの団地など数々の団地の見学をおこない、未来に残せる環境共生住宅に建て替えることを選択した。これは、建替え対象団地の入居者だけの議論のなかだけで出る発想ではなく、協議会の場において、有効なストックとしてのまちの資産、将来の環境問題を見据えたメッセージ性のある題材を自分たちのまちづくり活動のなかで実現させたいという思いからのものである。来春完成する住宅はまちづくり活動の成果だと思う。

— 建替え住宅従前入居者による入居の場所決め —

さらに建替え団地の入居者と協議会が中心になっ

て、建替え後の入居場所の決定、入居する住宅の間取りや使い勝手についての話し合いを進めていった。



建替え第1住宅の設計説明会のようす

高齢化した入居者にとっては、長年住みなれた家の更新の不安や引越しの手間を考えると、建替えは楽しみであるが、負担も多様で大きい。地域の実状に精通した協議会ならではのやり方をその都度話し合っ、顔のみえる関係のなかで、事業の実現をすすめていった。

たとえば、入居の場所決めも協議会が中心になって行った。まず、間取りや敷地での配置から決まる日当たりや通風といった各戸の特性について専門家の説明を聞いたうえで、全員が入居希望場所を出し合っ、話し合いにより、希望どおりの入居場所に入ることができた。現在、建替え工事が進行中で、連日のように「楽しみでしかたない」という住民の声を聞く。年明けには若松団地ではじめての建替えが完成する。引き続き建替え予定の団地の入居者との協議をすすめていくつもりだ。

●地域実状にあった利用のしかた わかいち風集会所とは？

これから計画が行われる建替え住宅も福祉ゾーンに位置づいていることから、当初、小規模ながら福祉目的の施設の合築を検討してきた。ここ、3年のあいだに、隣接する診療所のほうでは、デイサービス事業を行う



第2住宅の建替えに向けての意見交換会のようす

ことになり、また、地域に民間の「高齢者のためグループホーム」が建設さ

れるなどまちづくりの時間経過の中でその都度、検討の必要が生じた。協議会では「高齢者のためグループホーム」「知的障害者グループホーム」などの議論を経て、現在は、府営住宅の中にある「ふれあい集会所」のように、地域の主体性で利用できる集会所の姿を出したいと考えている。

現在、“わかいち風集会所”とはどのようなものなのか、住宅の建替えに伴って併設される施設のソフトの議論が課題となっている。

●これからの若松町一丁目まち協は

当団地でも、古いながら保育所、老人いこいの家、人権文化センター、公衆浴場、児童館などの施設を点在させている。古くは地区内施設として徒歩での利用者が中心だった。現在は遠方からの利用者も増え、それに伴う駐車場の整備や道路の整備が、利便性だけでなく、安全上も改善すべき要望となってきている。“奥まったまち”という印象も面的整備なくして改善はできない。さらに、これからのまちづくりは建替えだけでも、20年先まで継続することになっている。この先も、まちのありかたをめぐる協議の過程で柔軟に計画を変更し、時代にあわせて見直しを行うことが求められるであろう。

今後さらに、協議会自体がまちづくりの体力をつけて、途切れることなくまちのあり方を協議していきたいと考えている。

